

都留を、観察し、記録する

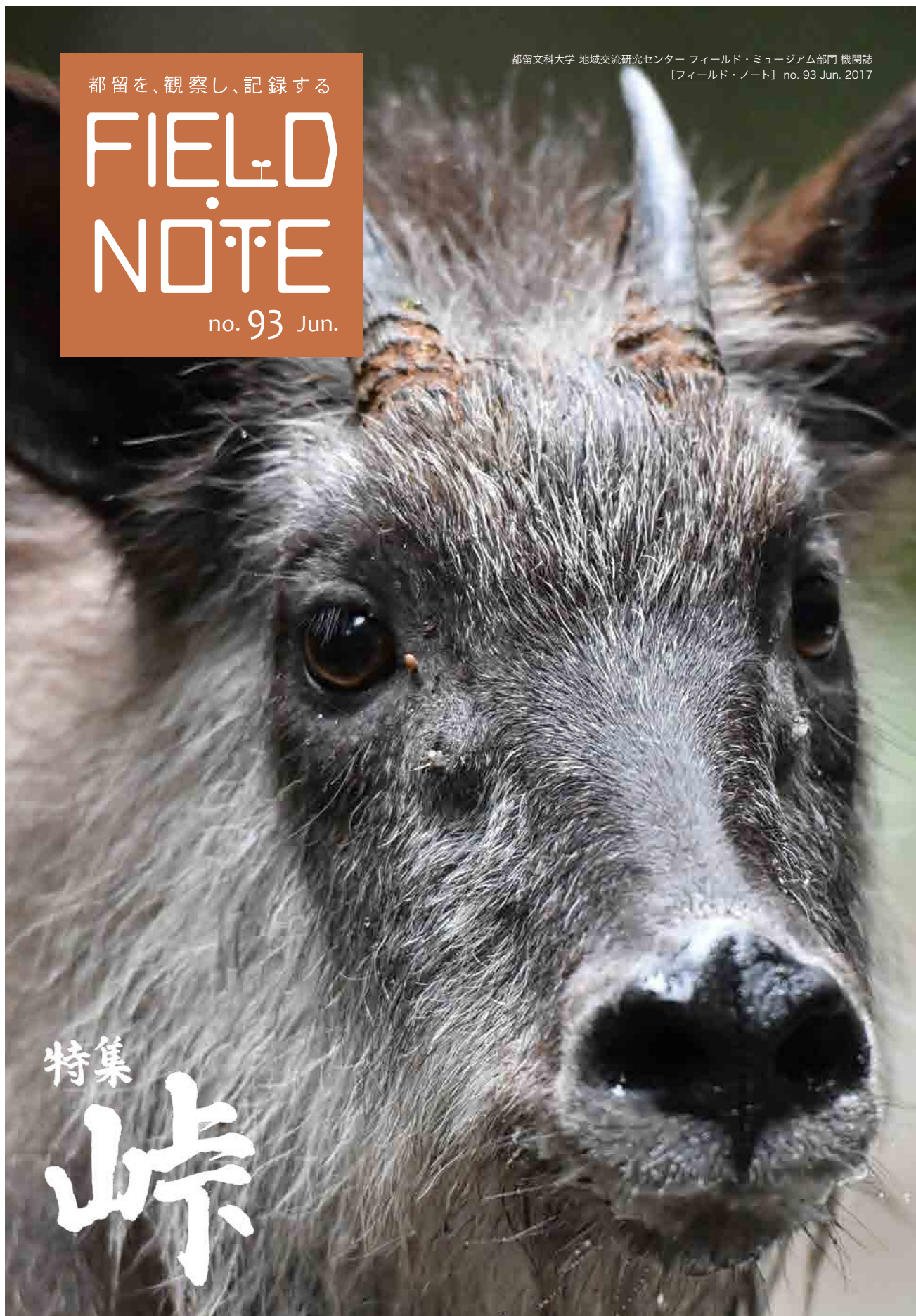
FIELD NOTE

no. 93 Jun.

都留文科大学 地域交流研究センター フィールド・ミュージアム部門 機関誌
【フィールド・ノート】 no. 93 Jun. 2017

特集

峠



FIELD·NOTE

no.93 Jun.

contents

- 06 特集 峠
- 08 どうざか 道坂峠
- 10 ちがさか 近ヶ坂峠
- 12 にじゅうまがり 二十曲峠
- 14 てんじん なつがり かはた 天神峠 (夏狩～加畑)
- 16 たまがわ よなわ 天神峠 (玉川～与縄)
- 18 あさひばば とざわ 天神峠 (朝日馬場～戸沢)
- 22 連載 都留の山々を歩く
第4回 今倉山～赤岩
- 24 よし江さんの結婚式
- 26 天ぷら屋さんが都留にくる
- 28 扉を開けて進む
- 31 フィールド・ミュージアムの楽しみ
- 32 幸せのアルバム
前編ー現在までのあゆみー
- 35 ムササビ観察日記
- 36 てくてく都留さんぽ
No.1 ちょっと都留の湧水めぐり
- 38 はじめまして、つる
- 40 フィールド暦
- 42 夜、動物たちは？
センサーカメラが写した動物たち
- 44 FIELD NOTE News



編集室前のプランターで育てていたサンショウバラの花が咲きました。
薄いピンク色の花びらと葉っぱの緑のコントラストがきれいです。聞いていたとおり、花をつけていたのは1日だけでした(撮影日:5月29日)

Field・Map

01 急勾配に魅力あり
道坂峠



02 長い道のりに幾多の発見がある
近ヶ坂峠



03 富士山絶景ポイント
二十曲峠



04 ガードレールをまたいで、峠を越える
天神峠（夏狩～加畑）



05 ふかふかの段々畑、ありました
天神峠（玉川～与縄）



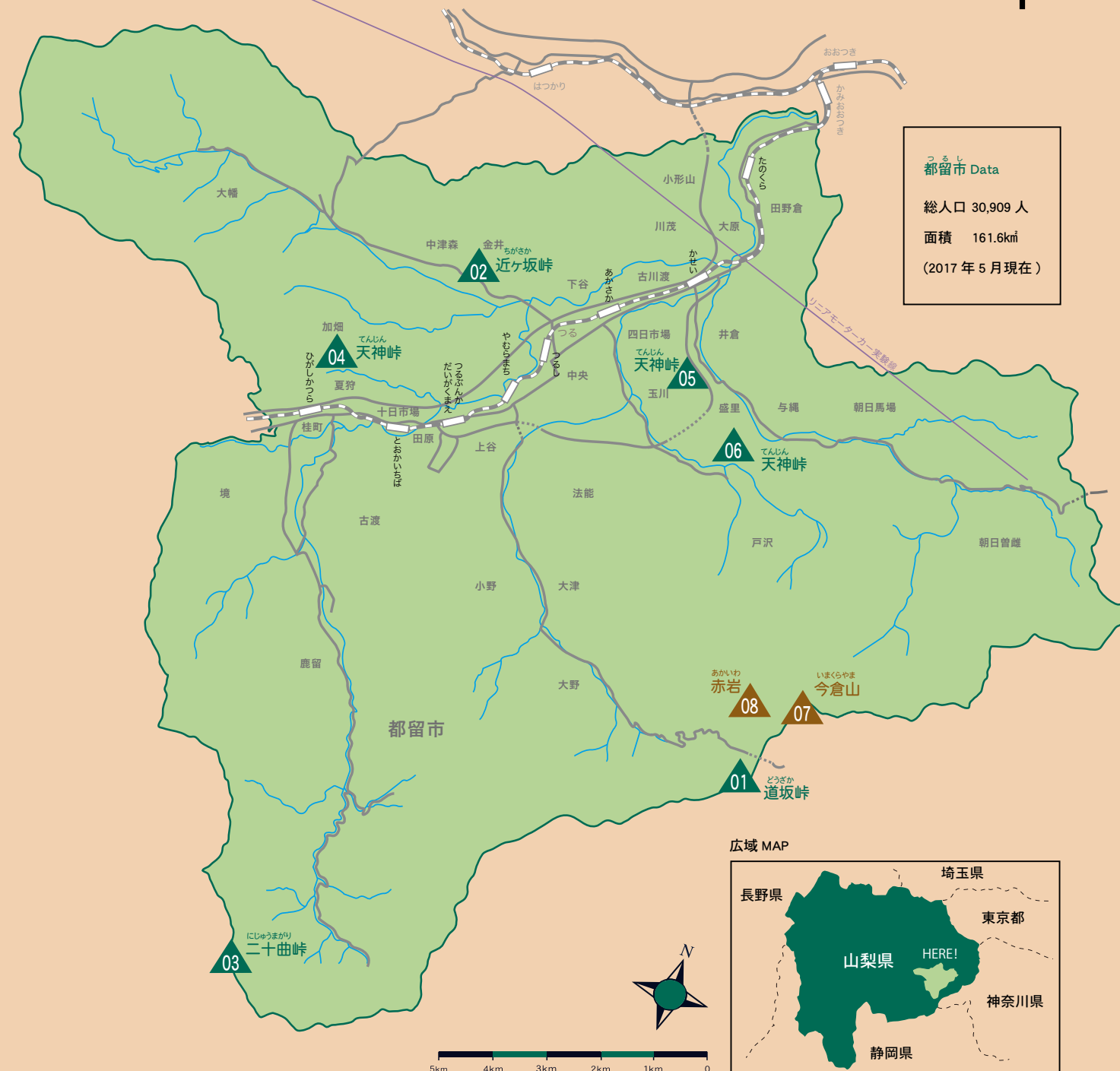
06 脇道にそれたっていいじゃない
天神峠（朝日馬場～戸沢）



07 多くの動植物に出会える山
今倉山



08 360°の眺望
赤岩（松山）



特集

峠

「都留にはたくさん峠がある。」

そう聞いて私たちは峠に興味を持ち始めました。

でも、そもそも峠ってどんなところだろう――。

峠についてわからないことだらけの私たちは、

ミュージアム都留の森屋雅幸さんもりや まさゆきにお話をうかがいました。

峠とは上り道と下り道の境目を指すこと。

都留には峠が30ほどあること。

昔は交通の要所として、人やものの交流に不可欠だったこと。

峠のイメージが、私たちのなかでちよつとずつふくらんできました。

それでも、自分たちの足や目で確かめてみないと

わからないことばかりです。

歩くのは大変なのか。

峠を今も歩く人はいるのか。

どんな生きものがいるのだろうか。

私たちは峠に足を運び、歩いてみることにしました。



a. 下り始めて 10 分ほどの、ロープが木に巻き付けられているところ。約 5 メートルを 30 歩くらいで何とか下った b. エイザンスミレ。タチツボスミレより数は少ないが、2、3 箇所で見られた c. 道志側にある、閉ざされたトンネル（旧道坂トンネル）



道坂峠はかつて交易に用いられた、道志村から馬で薪炭がもたらされたそう。そんな峠の一部を、道坂トンネルの都留市側からのぼった。

傾斜が急で、のぼり始めてすぐに息が上がリ、汗が出てくる。5 分ほどで動物が穴を掘った跡を見つけた。両腕をめいっばい広げたくらいの大きさだ。横に伸びた枝の下をくぐったり、木の根っこや石につまづかないようにしたりと、さまざま難関をくぐり抜けていく。うす紫色のタチツボスミレや、ほんのりピンク色のエイザンスミレには何度も癒された。峠道は土と草、茶色と緑色の地面だ。かわいらしいスミレの色は、そんな味気ない地面によく映えている。傾斜のきつい峠なのに、5 月 4 日には計 15 人ほどの人と出会った。改めてのぼった 29 日は、私たち以外に誰もいない。そのぶん、木がミシッパキツという音、虫が飛ぶ音、

道

坂峠はかつて交易に用いられた、道志村から馬で薪炭がもたらされたそう。そんな峠の一部を、道坂トンネルの都留市側からのぼった。

ホーホケキョ、ホケキョ、とウグイスが鳴く声がよく聞こえた。

30 分ほどで頂上と思われるあたりに着く。スマートフォンの GPS 機能を使って都留市と道志村の境界を探した。分かりづらいが、ちょうど境界の上と思われる地点に立つことができた。ここからが道志、ここからが都留、と誰かに自慢したくなる。道志方面を下るのは急すぎて危険だというので、また同じ道を引き返し、都留市側に戻ることになった。下り始めてすぐに、よくこんな道をのぼってきたなと驚く。湿っぽい地面では、3 回も足を滑らせた。

急傾斜の道坂峠をのぼりきったぞ、都留市と道志村の境目に立つことができたぞと胸を張ることができた。危険な道を通ってでも隣町へ行きたくて通っていた昔とは、峠の使いかたは大きく変わっている。道坂峠は急勾配を持ちながらも、今も人に愛されている峠であった。

拡大図

恩賜林の境界石。見た目は三角点に似ている

道坂トンネル

尾根にあった看板

1005.1m

30m

入口のようす

01 道坂峠

どうざか

「不公平」という地名のバス停。草におおわれていて、ほとんど隠れてしまっています

都留

道志

道坂トンネル

恩賜林について説明している看板がありました

100m

車道から眺めた風景。ガードレールがないので景色も見やすいポイントでした

歩いた日：2017 年 5 月 4 日・29 日

場所：都留市大野から道志村神地

標高：1127.3 メートル

歩いた距離：約 1 キロメートル

所要時間：約 1 時間

都留市側から出発

※灰色は車で通った峠道
茶色は足でのぼった峠道



a. 空に向かってまっすぐ伸びたスギたち。整ったようすから、人の手が加えられていることが分かる。自生している木よりも背が高かった b. 大きな岩の上にあった馬頭観音。近くにある湯のみには何も入っていない c. 穴のなかにあるフン。アナグマのものかもしれない。まだ新しいものようだ d. 丸太でできた橋。歩いてもビクともしないほど頑丈にできていた

民家はなく、周囲は山だらけ。人の生活が感じられたのは、老人ホームとフットサル場だけだった。私たちはそこを出発点に初狩側から近ヶ坂峠を歩き始めた。

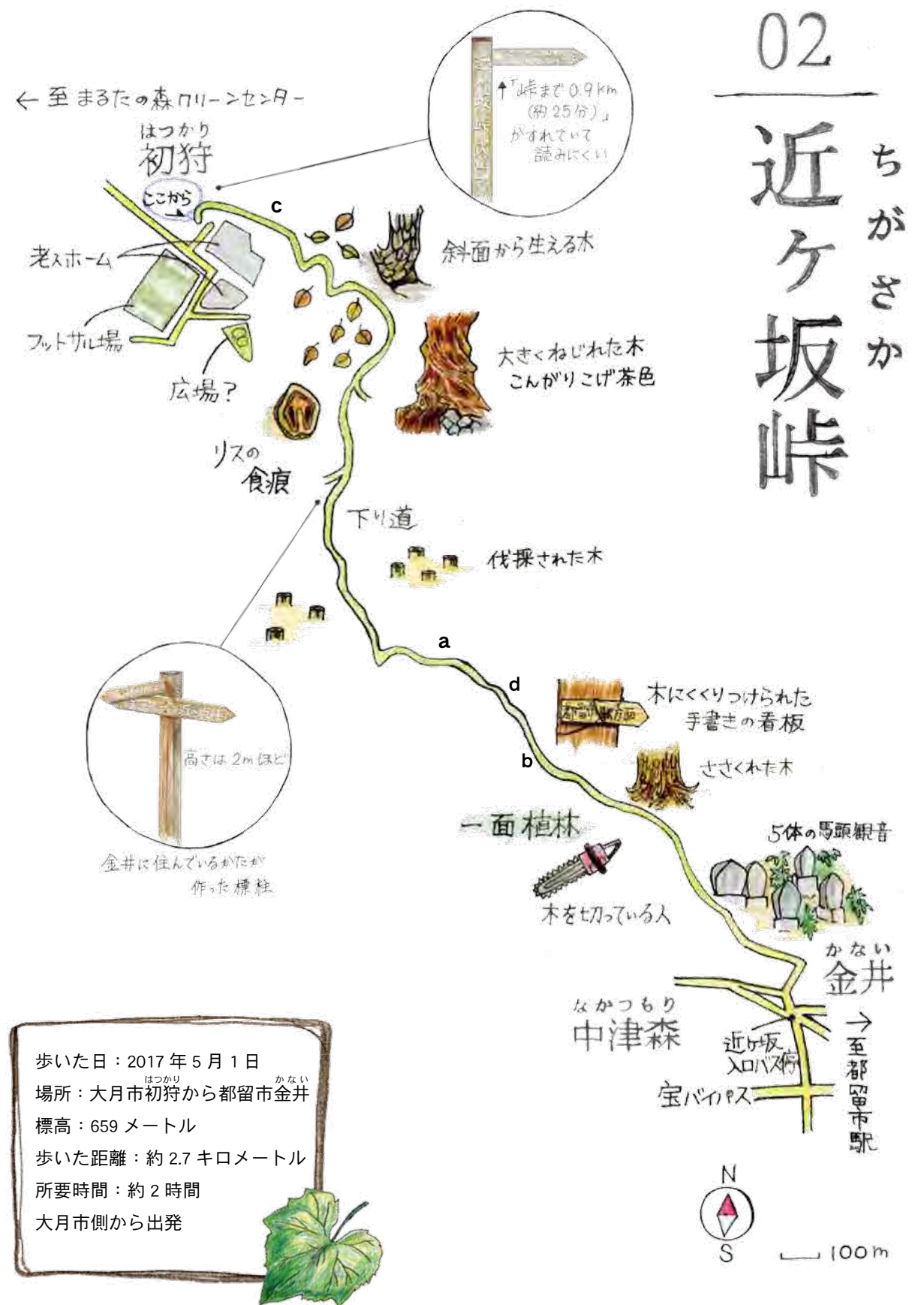
峠道は人が一人歩ける程度の道幅。頂上に着くまではほとんど上り道だ。入ってすぐは土がふかふか歩いてとても歩きやすい。しかし10分ほど歩くと、あしもとには落ち葉や木の枝が増える。落ち葉は靴に入ってくるし、木の枝はばきばきと踏んで折りながらでないと進めない。倒木が峠道をふさいでいるところもあった。地面と倒木のあいだが あったのでぐぐって抜ける。地面を観察しながら歩くと、掘られたであろう穴のなかに動物のフンを見つける。リスの食痕も3、4個見られた。小さな発見を繰り返して、35分ほどで頂上にたどり着いた。少し休憩をし、金井に向けて次は下り道を歩く。

上り道とようすががらりと変わる。木が等間隔に、峠道をなぞるよ

うに生えている。人の手によって植えられたようだ。切られた木がたくさん倒れている場所もある。水が流れていない小さな川には、丸太でできた橋が架かっていた(写真d)。橋を渡ると見えてくる沢の近くに、大きな岩がある。岩の上には馬頭観音と白い湯のみがあった。馬頭観音を過ぎると、車のタイヤ痕がある幅の広い道になる。途中で菜の花が植えてあったり、畑があったりした。人の生活が徐々に感じられるようになる。もっと進むと民家や県道が見えてくる。峠道の最後には、馬頭観音が5体並んでいた。

近ヶ坂峠には二つの顔があった。自然がそのまま残る初狩側と、整備された金井側。地域のかたは標柱を作ったり、雑草抜きをしたりと近ヶ坂峠をとて大切にされているのだ。ふだん生活しているだけでは気づくことのできない、自然のなかでの発見や、峠と人とのつながりを近ヶ坂峠で感じることができた。

杉浦茜(国文学科2年) 絵・文・写真
平岡摩梨菜(社会学科2年) 文・写真





a. 忍野側の道。峠の展望所まで同じような道が続く b. 二十曲峠の歴史についての看板。近くには山の神の鳥居があった
c. 鹿留側の道筋の川。山の高いところでは細い沢だが、道を下るとともに幅が広がっていく

5 月7日、都留市鹿留と忍野村をつなぐ二十曲峠を訪れた。この日は車とバイクで、忍野側から峠道の頂を目指した。頂上までの道は舗装されていて、幅は車1.5台分ほどだ。道の左右には林が広がっている。峠の付近には別荘のような家が点在していた。

峠の頂上には、「二十曲峠」と書かれた看板と石碑が立つ広場があった。この日はゴールデンウィーク中ということもあってか、登山者や家族連れなどで賑わっていた。広場からは忍野の町並みと、その奥に富士山が見える。富士山がよく見えることから、訪れる人も多いようだ。石割山から杓子山へと続く登山道もある。その付近には、山の神様を祀る鳥居と、水神様と書かれた看板があった。300年ほど前に、地域の人がこの山に入るようになり、峠を無事にこえることができるように山の神様を祀ったそう。

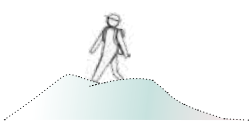
峠にいた地元のかたに話を聞くと、峠道は昔から炭焼きに使う木材を取るときに利用していたそう。昔は今ほど道も整っておらず、山道を使いながら木材を取り、焼いた炭を運んだとおっしゃっていた。

帰りは鹿留方面へと下った。鹿留側の道も舗装されており、道幅は忍野側よりせまく車1台と少し分。しばらく山の斜面に作られた車道を進む。少し標高がさがると、川沿いに道を進むようになった。道中には、枯れ沢がいくつか見られた。忍野側とは違い、家は見られなかった。下り坂が終わると砂利道となる。そこを少し進むとフィッシングセンターが見えてくる。

峠道と聞いてもつと人通りの少ない道を想像していた。けれど二十曲峠はそのような峠ではなかった。富士山を見るため、山に登るため、いまでも賑わう峠道だった。

長尾泉（初等教育学科4年）＝絵・文・写真
小俣深和（社会学科4年）＝文





a. 十二天神社のわきから峠を目指す
と、草原を通る。橋を渡り右手の山
へと進んでいく



b. 加畑側から見た天神トンネル。ト
ンネルの銘板には旧市長の名前が刻
まれている

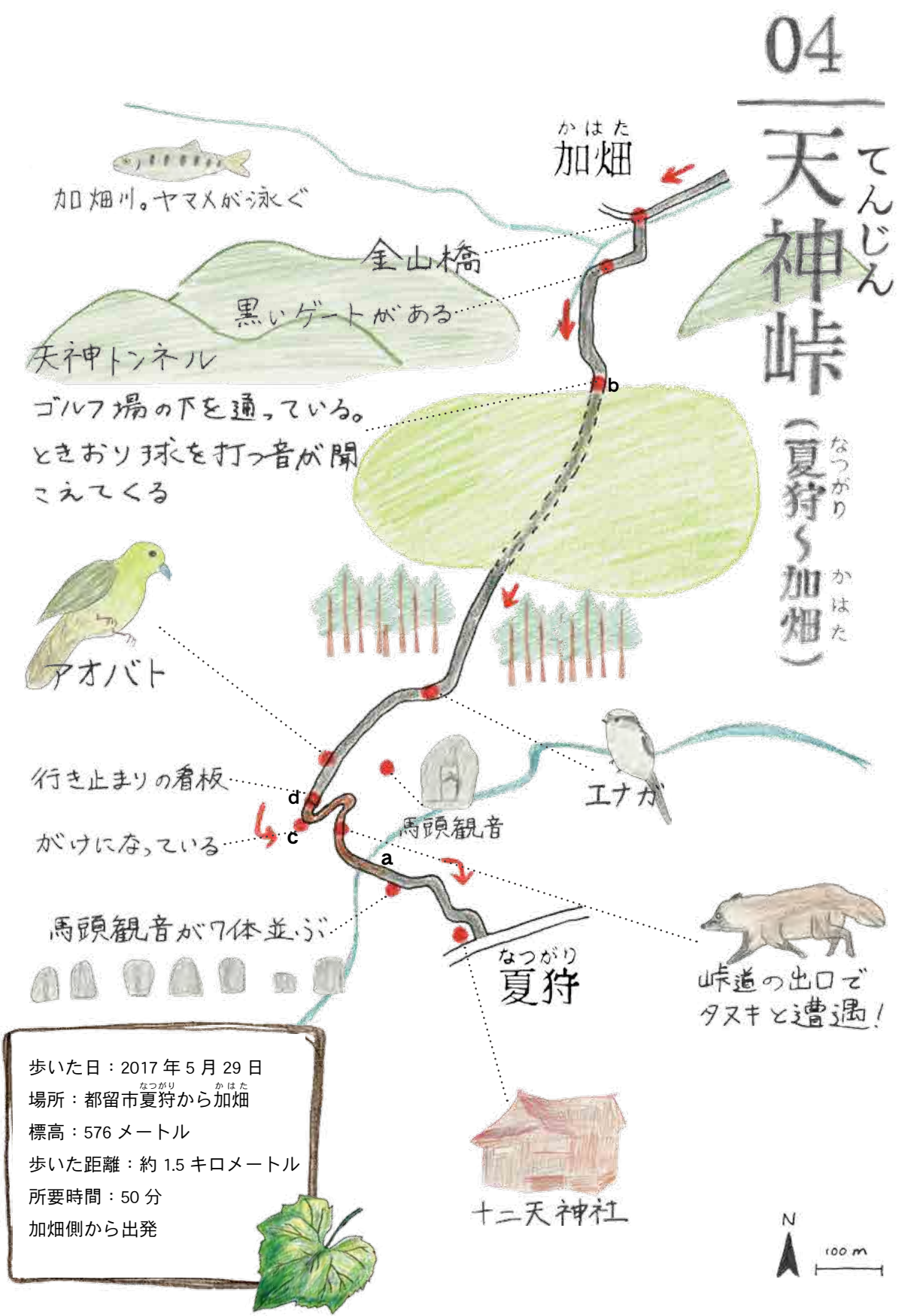
c. 切り立った崖のきわを歩いて進む。
水抜き用の黒いパイプがむき出しに
なっていた

d. 行き止まりと書かれた看板が二つ
もあるが、峠道は続いている。この
ガードレールをまたいで夏狩へ

夏 狩と加畑をつなぐ天神峠。
5月29日に峠道を歩いた。
加畑からの道はきれいに舗装されて
いて、歩きやすい。だれも手入れし
ていないのか、道沿いのガードレール
には草が巻きついていて。入り口
から5分ほど歩くと天神トンネルが
現れる。梅雨入り前の暑さに比べ、
なかにはひんやりとして気持ちいい。
トンネルを抜けても舗装された道
は続く。道のわきにはクサイチゴが
群生していた。夏になれば甘酸っぱ
い実が食べられる。赤い実で彩られ
た道を想像すると心がおどります。
さらに歩くと、右手の森からリ
コーダーの音色のような鳴き声が聞
こえた。「オー、アーオー」。鳴き声
の先をカメラで探すと、木の枝にア
オバトが止まっていた。薄緑色の体
を見て、こんなにきれいなハトがい
るのかと感動した。
アカマツ林をこえて10分ほど歩くと、
ガードレールと「行き止まり」

の看板に行きあたる。そこから先は
工事が進んでおらず、草むらをかき
分けて下りていく。人が使ったのか、
動物が通ったのか、かすかに道がで
きている。峠道の出口の近くにある
ササの藪から、なにかが飛びだした。
犬かと思っただけ、よくみるとタヌキ
だ。突然の出会いにお互い固まる。
3秒ほど目が合うと、タヌキは走り
去っていった。まさか峠道にタヌキ
が出てくるとは思わなかった。
この天神峠にはもう人の往来はな
いのだろうか。日をあらためて、5
月30日にもう一度加畑をたずねてみ
る。そこで加畑にお住まいの、峠や
山道を歩くのが趣味だという森嶋
秀香さん（しゅうか）に出会えた。「新しい道
路ができた」いままでは峠として使っ
ている人はほとんどいないと思う」と
話してくださった。
山を通り抜ける天神峠は、さまざま
な生きものとの出会いを楽しめる
場所でもあった。

佐藤琢磨（社会学科2年）＝文・写真
南條新（初等教育学科4年）＝絵・文・写真





a. 鳥居をくぐり峠道を目指す b. 新緑のアーチ。この先が頂上だ c. 緑に覆われた柵。柵の向こうに畑の跡がある

1 50段ある阿夫利神社の石段を登る。私たちは、その先の峠道から出発した。道幅は約3メートルで車が1台通れるほどだ。1950年ごろに県の予算で道が舗装される前、この道の幅は約1メートル30センチで馬と人が通れるほどだったそう。峠道に入っていくと両脇に青々とした木々が生い茂り、気持ちのいい風が通り抜ける。三つほどカーブを曲がると約10分で頂上についた。木のあいだから空がよく見える。曲がり角にはスミレが咲いていた。その道に沿って、私たちは与縄方面へと林道を下っていく。とたんにあたりは薄暗くなった。両脇には等間隔に杉が植わっている。ところどころに咲いたヤマブキやマムシグサが、林に春を告げる色を添えていた。

曲がり角が多くあり、そのつどカーブミラーがある。与縄地区に入るあたりから少しずつ杉林がひらけてくる。峠道の西を国道139号線が通っている。植物のすきまから都留第二トンネルを見下ろすことができた。トンネルが開通してから天神峠を利用する人は少なくなったそう。大きな鉄塔が建つ近くには、畑の跡らしきものが見られた。足を踏み入れると、ふかふかしていて気持ちいい。区分を示していたのか、獣の侵入を防ぐためだったのか、植物に覆われた柵がいくつか立っている。さらに下っていくと民家が見え始め、与縄の集落へと道が続いた。

玉川地区に住む牛田一郎さん(69)にお話をうかがうと、この道は今でも冬場に林業で使っているのだという。峠道で見つけた畑の跡には昔、段々畑があったそうだ。

天神峠は、交通の便が変わっても、途切れることなく人々がかよっていることがわかる。峠道を歩きながら、同じ道を歩いた人やそこで働いていた人たちを想った。





a. 天神社。この空間だけひんやりとした雰囲気があり周りから浮いていた。神聖な場所に足を踏み入れてしまったという気持ちになった b. オシラサマのお社。トタンの屋根は平成22年に設置されたものだと、木の板に手書きで書いてあった c. 舗装された峠道の途中にある見晴らしの良いスポット。与縄地区が一望できる d. オシラサマの社に置かれた一円玉。いつごろ置かれたものなのだろう

そこが目的の天神峠だと知らなかつたら、自分ももう峠道に入っていることに気づかなかつただろう。それくらい、この峠道はなんの変哲も無い道路だった。車を降りて辺りを見渡すと、ヤマブキやスギなどの木々に囲まれている。来た道を歩いて3分ほど戻ると、人が一人通れるくらいの脇道を見つけた。足を踏み入れてすぐに、小さな社に気づく。天神社だ。少し高台になっているスペースに、周りの木々よりも太い3本の木に囲まれるようにして社がある。まだ紙垂が白く、新しい。社に背を向けて立つと、目の前に来た道のほかにふたつの道があることに気づいた。ひとつは下にある戸沢川へ降りていく道だ。ではもうひとつはどこへ続く道だろう。オシラサマが祀られている社があると聞いていたので、もしかしたらこの先にあるかも、と駆け足気味にその道を進んだ。道は思ってい

たよりも急で、息が切れる。途中でアケビやヤマツツジなど、山道を歩かないと出会えない植物を発見できた。10分ほど歩くと、先ほどの天神社と同じような少しひらけた場所に社があった。オシラサマが祀られている社だ。近づく、社の前に一円玉がひとつ。ああ、わたしのほかに誰かがここにいたのだと実感する。天神社とオシラサマの社、ふたつの社は戸沢地区で今も昔も大切にされているのだろう。いつも車でなげなく通り過ぎる道路は、かつて馬や人が隣村へ行くために通っていた道だろうか。目こそらせば、脇道や社を見つけられるかもしれない。この急な地点でほかの誰か息を切らしたのかな。そう想像し始めると、ふだんは車で通り過ぎる道を、今よりずっと楽しめるのだと気づいた。

高橋光(比較文化学科2年) 〓 絵・文・写真
小泉篤広(社会学科2年) 〓 写真





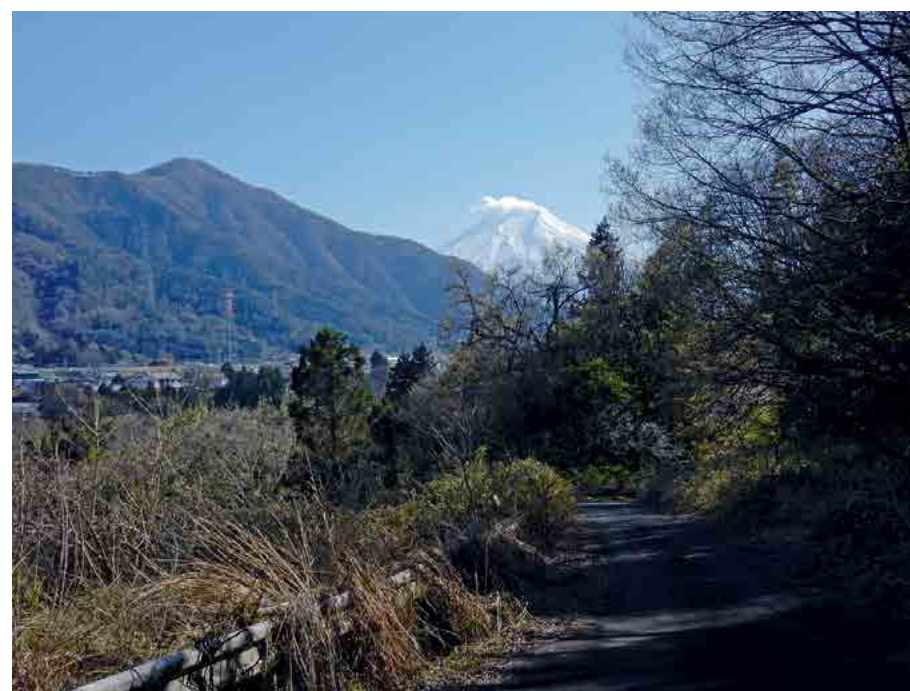
特集 峠 まとめ

舗装された峠道をランニングやツーリングで楽しむ人。林業を営むために峠道を通る人。私たちが峠道を歩いているとき、いろんな人に出会いました。

小さいお社の前にぽつんと置かれた一円玉や段々畑の跡など、人がいたのだと分かるものもを見つけました。お社に手を合わせる人や畑を耕す人の姿が想像できます。

峠はほかの地域へ行くために、古くから使われてきました。今では、峠道以外にも道はたくさんあります。それでも登山目的で訪れたり、農作業をするために山に入ったり、峠へ足を運ぶ人がいます。

目的は変わっても、人が峠へ向かうことで峠は峠としてあり続けるのです。





①赤岩山頂からの富士山。直線距離で25キロメートル以上も離れているとは思えないくらい大きく見えた
②赤岩山頂から北東方向を見渡す。遠くまで見渡せるため、山々が連なっているのがよくわかる
③御座入山の近くにある岩場。危険防止のためロープがつけられている
④赤岩山頂のようす。看板は高さが2メートルほどある

ては身を隠す、よい止まり木になっているのかもしれない。

赤岩（松山）へ

今倉山を出発してから15分、カラマツの林を抜けると、空が見えて御座入山の山頂に到着した。そこから20メートルほど進むと、とつぜん岩場が現れる。ロープがあるので安心できるが、慎重に歩く。岩場の区間はすぐにおわり、広葉樹の多い森になった。森のなかの下り坂を歩く。今倉山から25分、道坂峠へ下る分岐を後にし、赤岩（松山）を目指す。分岐から5分ほど歩くと巨木が現れる。木の幹は直径で2メートルをこえている。何の種類かはわからなかったものの、その巨大さに驚いた。そこからまもなくして、頭上が開けてくる。そして、出発してから約2時間で赤岩の頂上にたどり着いた。

赤岩の頂上は何も遮るものがない。今まで連載で登った山のなかで一番の眺めだった。360度すべて

が見渡せる。近くの山々はもちろん、南西の方角には御正体山と杓子山のあいだからまだ雪の残る富士山、西には三つ峠や甲府方面の山々、東には丹沢山地、そして北には大菩薩山系や秩父山系の山並みまで見渡せる。山がどこまでも続いていることがわかる。同時にまだ登ったことのない山に思いを馳せた。

今回は都留市と道志村にまたがる山へ行った。大月市に住む私には、なじみのない山であつたため、どんな山なのだろうかといつも以上にわくわくした気持ちで登り始めた。道中ではいろんな動植物に出会うことができた。それらは私を楽しませてくれる。しかしそれ以上に、山登りの達成感やはり頂上での眺望にあるだろう。眺めを見渡したとき、がんばって登ってきた甲斐があつた、いつも思う。初めて登る山では、その達成感がより強く味わるのではないだろうか。

連載 都留の山々を歩く 第4回 今倉山～赤岩

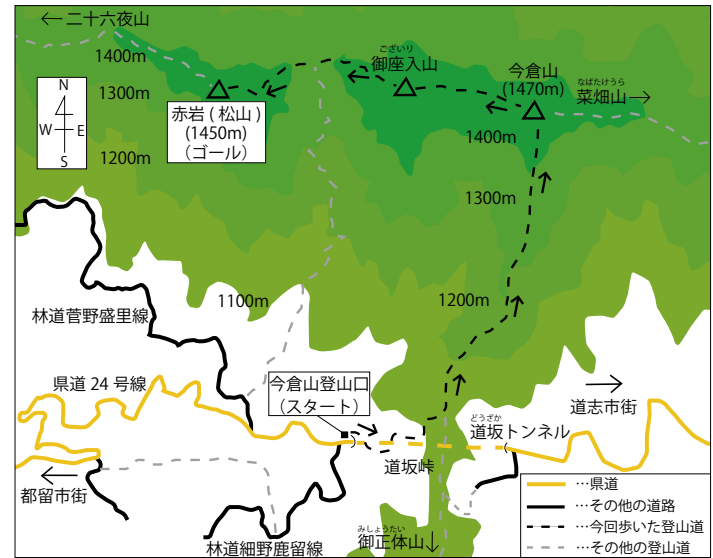


都留の山々に登って、山頂からの景色や登山道での発見を楽しみたい。第4回目は都留市と道志村にまたがる今倉山、そして赤岩（別名：松山）という二つの山を目指した。

小泉篤広（社会学科2年）＝文・写真
南條新（初等教育学科4年）＝写真



▲マメザクラの花



*今倉山周辺地図（矢印は順路を示す）

都留市と道志村にまたがる山梨県道24号線の道坂トンネル。トンネルの都留市側のわきに今倉山へと続く登山口と、それを表す看板がある。

今倉山へ

4月の下旬。植物が芽吹く季節。登っていくと、針葉樹と広葉樹が混じっていることに気がつく。昨年葉を落とした広葉樹からは新芽が出ていた。まだ葉の色が薄くてきれいだった。地面は石があまりなく、歩きやすい。登り始めて10分ほどのところで桜の花が咲いていた。図鑑で調べてみたところ、マメザクラだとわかった。山に自生する桜であるという。花は地面を向いており、輪数も少ない。街なかで見られるソメイヨシノと違っておとなしい印象を受けた。そこから5分ほどで御正体山との分岐に着いた。その分岐を左に曲がる。道の両脇にはササが広がっていて、地面を見るとタチツボスミレが咲いていた。色は淡い紫色で、直径

2センチの小さくてかわいい花である。分岐から10分ほどすると地面に石が見られる。傾斜もきつい。息づかいが荒くなるが、その区間をさらに10分ほどかけて、なんとかこえた。そのあとは少し傾斜が緩やかになるが、まだ上り坂が続く。先ほどのように石は転がっていないが、つづら折りになっている道だ。そこを息を切らしながら15分ほどで登りあげると、今倉山の山頂にたどり着いた。

山頂は木々のなかにあり、周りを見渡すことができない。三角点と巨大なブナと思われる木があるのがこの特徴だ。巨木にはヤマガラなどの鳥が止まることも多く、鳥にとつ



何という植物か不明だが、新芽が芽吹きはじめていた

よし江さんの 結婚式



よし江さんが住む玉川地区。都留第二トンネル付近から撮影

4月25日、都留市玉川^{たまがわ}で出会った87歳の女性^{お嬢}は、都留市法能^{ほうのう}からお嫁に來たという。彼女の結婚式は、結婚式場で式をおこなうことが主流になった今とは、違っていた。

恋愛結婚のすえに

「今の人はたいがい恋愛結婚だけど、昔はお見合いばっかだったよ。私はそうじゃなかったけど」。私から目線をそらし、照れながらこう話してくれたのは、小林よし江さん^{よしえ}（87）だ。法能^{ほうのう}の引野田^{ひきののた}地区で生まれ育ち、昭和25年ごろ玉川へお嫁に來たのだという。そのころはお見合い結婚が主流だったため、恋愛結婚をしているかたはとても珍しかったそう。そんなよし江さんは、どんな出会いを経て結婚に至ったのだろう。

中学校を卒業したよし江さんは、都留市駅近くの救命器具を作る会社に、5年ほどお勤めしていた。そのころに、同じ中学校出身の男性と再会した。その彼が今の夫となる。最初は、よし江さんのお仕事が終わるのを彼

が待っていて、お話をして帰っていた。それが二人で待ち合わせるようになり、だんだんと仲が深まっていったという。「昔は今みたいに堂々と会えなくてね。結婚するってなったときも、仲間から親に言ってもらったよ」。自分たちではなく、友人たちが伝えるということは今ではめつたにないだろう。もし反対されてしまったら……。友人から報告を待っているときなんて、居てもたつてもいられなかったのではないか。そしてご両親の許可をもらえたよし江さんたちは、21歳で結婚した。当時では早いほうだったという。今年で21歳をむかえる私は、つい前のめりになってお尋ねしてしまう。「結婚式のようなすが知りたいです！」

家のなかで結婚式

昔は、「親分さん」と呼ばれる人が結納^{ゆいのう}から祝言^{しゅげん}までのお世話をしてくれたそう。親分さんはそれを職業としているわけではない。村のご近所さんがその役割を担うのだ。誰が

親分さんをしてくれるかは、それぞれの家で決まっていた。

その人を介して、まず初めにおこなわれたのが、結納だ。結納では嫁入り道具を買うための結納金が、新郎から新婦にたくさん贈られたという。そのお金でシンや桐のタンス、洗濯をするための直径50センチくらいの木のたらいに、布団を作るための生地まで買ったそう。今の金額でいうと、総額50万円ほどになるらしい。生活をするための必需品は、これでもいい揃うというわけだ。残念ながら、そのときの嫁入り道具はもう残ってはいないという。「昔は木を燃やして料理を作ったり、お風呂を沸かしたり、なんでもするでしょ？（嫁入り道具は）すすで真つ黒になっちゃってねえ。真つ黒でも残しておけばよかった。もったいないことしたよ」とよし江さんはおっしゃる。どんな色をしていて、どんな肌触りをしていたのだろう。壊れて使いつらくなってしまったところもあったのかな。それらの道具を見たことがないため、想像がむくむくとふくらんだ。

祝言になると、式をおこなう新郎の家に近所の人たちが10軒ほど集まった。式ときに新郎新婦が家から出て、どこかに挨拶にくことはなかったそう。お料理もすべて家で作り、木を折り曲げて作られた折箱^{おひらばこ}という木箱にに入れて出していたという。新郎新婦の親族や近所の人たちが、家でこれだけの人のぶんを作るとなると、きつと何日も前から準備をしていたに違いない。なんだか幸せな忙しさだ。

花嫁であるよし江さんの髪は「髪結いさん」に結ってもらったそう。「髪結いさん」とは、今でいう美容師さんのような人だ。「そうそう、そんでね着物はね、振袖みたいな立派なもんじゃないけど、江戸^{えど}褌^{ふんどし}を着たよ。たもとが50センチくらい。そんなに重ね着もしないで。白の長襦袢^{ながじゆばん}を着て、上は黒い着物で……3、4枚だね」。私が見たことのないものについて、よし江さんが身振りをつけながら説明してくださった。慣れ親しんだ家で花嫁姿になっていく。そうやって少しずつ気持ちを切り替えるための時間はとても大切だ。

新郎の家のなかでおこなわれると、式の前や最中の忙しさがまぎまぎと伝わってくるのだろうなと思った。お二人がどれくらい祝福されているかが、そこからも目で感じることができそう。それに赤ちゃんや小さい子ども、体が不自由で遠い式場まで行けない人にも、安心して晴れ姿を披露できる。そんなよさがあるのだろうなと思った。

よし江さんのお話を聞くと、結婚するときには家族以外にも親密に関わっている人がいたのだとわかる。結納や祝言のお世話してくれる親分さんに、料理などを準備してくれる近所の人たち。式のなかのほとんどのことに、よく知る誰かが関わっている。一人ひとりからお祝いされる時間が濃密だ。家の行事でもあり、地域の行事のようにも思える。そんな結婚式は、お祝いする側も、される側にも忘れられない思い出になるだろう。

山内利奈（社会学科3年）＝文

天ぷら屋さんが都留にくる



左上：鳥天井だけでなく、小腹が空いた人向けのハーフも魅力／左下：毎週のように足を運ぶ大学生もいる／右：鳥天井や鳥天はその場で食べることも、お持ち帰りもできる（すべて2017年5月23日）

4月15日のお昼ごろ。本学から、通称「文大坂」を下り、交差点を左に進むと、1台の車が停まっていた。車の横には「天ぷら」と書かれたのぼり。移動販売の天ぷら屋さんだった。どんな人が、なぜ移動販売の天ぷら屋さんをしているのだろうか。

走る天ぷら屋さん「まるや」を営んでいるのは、原田裕二さん（38）。丸い顔に、二重まぶたの目をしていて、初対面でも話しかけやすいやさしい表情をしている。笑うと目尻は下がり、いつも笑顔でいるのだろうと想像できる。頭にタオルを巻いて、目の前で天ぷらを調理するすがたに、じつと見入ってしまう。

原田さんは上野原市秋山の出身で、高校を卒業してから東京の調理専門学校へ進学した。その後、東京都立川市にある日本料理店で13年間働かされていた。秋山へ戻り、天ぷら屋さんを始めたのは2年前。本学の

近くにくるようになったのは昨年10月からだそう。

「まるや」の魅力は、注文を受けてからその場で天ぷらを揚げることだ。決まった時間にお店を開くのは、火曜日に都留市へくる時のみだそう。それ以外は注文を受けた場所へ行き、旬の野菜を使った天ぷらをその場で揚げています。

出会いが多くあるほうを

東京から上野原市へ戻り、店を構えるか、それとも移動販売にするか悩んだそう。原田さんは、たくさん



写真右は裕二さんのお兄さん。郵便局員をされていて、ときどきお手伝いにくるのだそう

の出会いがあると思い、移動販売に決めた。けれど、始めたころは苦勞もされている。「お年寄りのかたに

天ぷらをふるまいたかったけど、『詐欺じゃないか？』って疑われた」と笑いながらおっしゃる。だんだんと「まるや」が知られてくると、大月市や甲府市のイベントへの出店も増えた。去年は幼稚園のイベントにも呼ばれたそう。

とくに印象に残っているお客さんのことを尋ねると、「子どもだね」とおっしゃる。「誕生日会のおきにお宅まで天ぷらを揚げにいったと

き、子どもがすごく喜んでくれた。ニンジンがきらいな子どもでも、かき揚げにしたものなら食べてくれた」と楽しそうに話してくださる。やはり原田さんにとって、天ぷらを食べて喜んでくれることが一番うれしいことなのだろう。

なぜ天ぷら屋さんのか

数ある日本料理から原田さんが天ぷらを選んだのは、お年寄りのためを思つてのことだった。「おじいちゃんやおばあちゃんが、歳をとると危ないからと天ぷらを家で揚げ



天ぷらをサクサクにするコツは、揚げる前に油の温度を高くしておくことだそう

なくなってしまうから、移動販売で出来たてを食べてもらえれば」と天ぷらを揚げながら話してくださる。さらに、家で天ぷらを揚げようと

火曜日に天ぷら屋さんを開くときのメニューは鳥天井、鳥天井ハーフ、鳥天の3種類。300円から500円と、学生にやさしい価格になっている。なぜ鳥の天ぷらなのかと聞いてみると、「学生に向けて価格を抑えたかったというのと、ボリュームを出したかったから」という。ほかにも、『どんぶりのたれも濃すぎないようにして、また食べてもらえる味にしている』と話してくださった。原田さんが日本料理店でつちかった経験や技術が天井に凝縮されているのだろう。それをお手ごろな値段で食べられるのがうれしい。

これからの「まるや」

『まるや』をこれからどんなふうにしていくんですか」と尋ねると、「やっぱり、家の前で旬の野菜を揚げて、（お客さんに）食べてもらいたいからもつとたくさんの人に知ってほしいし、まずは味わってほしい」とおっしゃる。本学の近くにくるようになったのも、大学生に知ってもらうという気持ちからだった。

＊ ＊ ＊

移動販売だからこそ生まれるたくさんのお客さんが「まるや」を支えている。お年寄りのことを思つて始めた天ぷら屋さんは、ニンジンぎらいの子どもにとつても、大学生にとつてもうれしい存在だ。子どもからお年寄りまで、一つの場所にとどまらずに、揚げたての天ぷらを食べたい人へ届ける。そんな「まるや」に私はずっと通いたい。

佐藤琢磨（社会学科2年）＝文・写真

扉を開けて進む

杉浦茜（国文学科2年）＝文
山内利奈（社会学科3年）＝写真



「tobira」は天然酵母パンとお菓子の販売をおこなう。お店はかまえておらず、県内でひらかれるイベントを活動の場としている。調理、販売しているのは上田聖子さん（43）。たくさんの経験を重ねながら、上田さんはある目標へと向かって進みつつけている。

「今の仕事をしていてよかったことってなんですか？」と質問すると、「楽しい（こと）」とすぐに答えが返ってきた。上田さんに今の仕事をはじめめるまでの経緯を聞いていると、そのときそのときを楽しんでいるのが伝わってくる。今も昔も変わらず、楽しんで活動している上田さんの姿が想像できる。けれどその道のりのなかには、楽しいことだけでなく苦労もたくさんあるように私は感じた。

子育てを楽しみたい

上田さんは本学の初等教育学科の卒業生だ。卒業後、ソフト開発の会社に就職した。7年ほど働き、結婚を機に退職。その後出産し、富士河口湖町で子育てをしていたという。「河口湖には公園とか子育てサークルとかがたくさんあって、育児がすごい楽しかったの」と当時を振り返る。けれど地元都留市

に戻ってきたとき、子育てサークルがひとつもなかった。都留市でも子育てを楽しみたいと思った上田さんは、自分でサークルを作ろうと決心したのだという。

2008年10月に上田さんを含んだ3人で、「こぐまクラブ」という子育てサークルを立ちあげた。週に1回、複数の親子が集まって遊びや読み聞かせをしたり出かけたりする。子育てサークルを立ちあげることに前例がないからと、市の職員さんはあまり協力的ではなかった。「なんで？ いいことをしようとしているのにつて感じ」。それでもめげずに努力した結果、少しずつ応援してくれる人が増えていった。そして週に1回「いきいきプラザ」（※1）を借りられることになった。

「自分」としてやりたいこと

下の子どもが幼稚園にあがるころ、子育てが少し楽になったという。そこで上田さんは一人のお母さんとしてではなく、もつと自分としてなにかをしたいと考えた。そして「手仕事カフェ」をはじめた。「びゅあ富士」（※2）で月に1度、小さい子どものいるお母さんが手芸を楽しむというものだ。そこで上田さん

はお茶や手作りのお菓子を提供していた。このころから自分のお店をひらきたいという思いがでてきたそう。

「手仕事カフェ」には、大月市や上野原市、富士河口湖町などの都留市外からもたくさんのお母さんが集まってきた。「手仕事」という名前がついているからか、手先の器用なお母さんが多かったそう。じゃあなにかやってみようか、と上田さんたちはフリーマーケットのようなイベントをはじめた。自分たちで作ったものを販売していくうちに、それを仕事にする人が何人かでてきたという。その人たちを見て、お菓子を作って売っていた上田さんは「私も（仕事として）やりたいな」と思うようになったそうだ。けれどイベントの規模が大きくなれば、食べものの販売には保健所の許可がなくてはならない。そこで上田さんは工房を作ること考えた。

「tobira」をはじめ

工房を作ろうと思いつてからおおよそ3年後、工房を自分で作りあげた。家に余っていたプレハブ小屋を、自分の手で工房にしたという。そして「tobira」としてパン



上田さん（2017年3月5日）とスチャージャーをまじえながら、楽しそうに経緯を話す上田さん（2017年3月5日）

「tobira」一本でやっていく決心をしたのだそう。

パンは当初、独学で作っていたという。そのときはイースト菌を使ったパンだった。

でも天然酵母のパンが好きだから自分でも作りたい。そう思い、天然酵母のパン教室に通った。工房を作りながら教室に通ったという。「プロ意識なんでもない。なにをやるににおいても。極めるとかかっこいいものはない」と上田さんはおっしゃる。

現在「tobira」は、都留市や富士吉田市、甲府市、富士河口湖町などのイベントで週1、2回ほど販売をしている。ひとつのイベントのために、200〜300個のパンを一人で焼く。そのため前日は睡眠時間が1、2時間しか取れないくらい忙しい。手間暇をかけ、ていねいに作られたパンは完売するほどの盛況ぶりだ。

進みつつける

そんな上田さんの今の目標はカフェをひらくこと。パンとお菓子だけでなく、飲みものや軽いランチを出したいと考えているのだという。じつさいにパンを販売することで、今までは想像だったことが実体験としてわかるようになった。それが自信にもつながったのだそう。

どんな状況でもそこで立ち止まらずに、

都留では、人びとの暮らしや自然を間近に観察できます。

地域のいまを記録し、報告します。

鎮守の森のムササビ

都留市鹿留地区に今宮神社はある。背後に山がある鎮守の森で、ここには幹周りが13メートルにもなるケヤキがある。写真は、今年の春に生まれたムササビの子どもが滑空する様子だ。親は全長が約80センチになるが、この子どもはその半分の40センチほど。あたりは薄暗いのにも正確に着木し、地面に落ちることはない。

(2017年5月21日撮影)

自ら行動を起こしている上田さん。どうしてもこんなにも行動にうつすことができるのだろう。その理由を、「自分でも自分のことわかんないんだけど」と話しはじめてくれた。「そのときできる最大限のことをやっている」と上田さんはおっしゃる。

それでもし壁にぶつかったら、「すごいっらい状況も楽しくしよう」と思うのだそう。「嫌なままやると嫌だから、楽しくやりたいな。どんなことをやっててもそうは思ってる」と上田さんは強くおっしゃった。たとえばソフト開発の仕事は、やりたいことでも好きなことでもなかった。けれどやめずにやりとげたことで、全体をみる視野が広まり、それが今にも生きているという。

「tobira」の由来

「tobira」の名前の由来を上田さんにかがってみると、「ひらめいただけ」と笑う。「なにかをやろうと思うと絶対に勇気がいるわけ。扉を開けて一歩行つて進んで行く」とまた扉があるじゃん。そんなイメージなのね。で、開けてどこにつながってるかなんて、開けてみないとわからないし、入ってみ



さまざまなタイプのパンが並ぶ。どれにしようか選んでいるだけでも楽しい(2016年9月9日、写真提供=tobira)

ないとわかんないし、思ってたのと違ってるかもしれないけど、必ずまた扉があつて」。将来カフェをひらいたときも、カフェの名前は「tobira」にするのだという。

上田さんは目標に向かってこれからもたくさん扉を開けて、楽しみながらぐんぐんと進んで行くのだろう。そして目標を成しあげたら、また新しい目標をみつめて進みつづ

けていく。上田さんが立ち止まることはないのだろうなと私は思う。「極めるとかかっこいいものはない」と上田さんはおっしゃるけれど、やりたいことをどんどんみつけて、挑んでいく姿はかつこよくみえた。

ゆつくりと話す、のんびりとした雰囲気の中にも、言葉の節々からは自信を感じた。そのときそのときに自分ができることを全力でやっただからこそ、それが今の自信につながっているのだ。そして、嫌だなと思うことでも楽しくしようとする姿勢が、そのときできる最大限のことをやるために必要なことなのだろう。

つらい状況も楽しんでしまえば、今できることを精一杯することが出来る。そしてそれがのちのちの自信へとつながっていくのだと、上田さんから学んだ。



幸せのアルバム

前編 ー現在までのあゆみー



谷村町駅を出て、高尾町通りを都留市駅方面に15分ほど歩くと、左手に見えてくる。あじさい色の大きな扉を開くと、まったく違う世界へ訪れたような気分になった(2017年4月17日)

ご夫婦の仕事は写真を撮ること。「iスタジオ」という写真館で、日々たくさんの人の幸せな瞬間を残している。「なんで都留でやってるんだろうって思うよね」と冗談めかして笑顔でいう伊藤哲也さん(47)と、それを聞いてほんとにね、とでもいうような表情で笑う利花さん(47)。しかし私に語ってくれた言葉には、むしろ都留で続けていきたいという想いが詰まっていた。

自然な姿を写す

4月17日、午前11時を少し過ぎたころ高尾町通りにある写真館へうかがった。入ってすぐに、私の想像していた写真館と違う、と驚く。それまで、写真館といえば薄暗くて、重たい暗幕が部屋を覆っているようなイメージだった。でもこの写真館は大きな窓に薄いレースのカーテンがかかっているだけなので、太陽の光がたっぷりと部屋に注がれる。壁は一面真っ白。私の想像とは真反対の明るい空間だ。

写真館の内装が現在のようなになったのは2009年。先代から哲也さんと利花さんに

画を見ているような気分になる。きつとお二人には、初めて会う人がどんな笑いかたをするのかお見通しなのだろう。

時代とともに変化する

この写真館が正式に代がわりした年だ。このような内装にした理由を利花さんは、「かしこまった写真は(かしこまった)写真でいいんですけど、とくに子どもさんとかは普段のかわいらしい姿とかを自然光を使って撮るってことをしたくて」という。哲也さんも「ほら、昔の写真館って入りづらいというか、ね。子どもなんかは後ずさりしちゃう感じだよ。だから明るいところで自然な感じで撮れるように」とおっしゃっていた。イメージはハウスタジオだそう。

お二人の言葉の通り、飾ってある見本の写真はどれも本当に自然な表情で、動きの瞬間を切り取ったようだった。写っている子どもたちは今にも動き出しそう。写真なのに動

伊藤家では哲也さんのおじいさんの代から写真を撮り続けている。1931年に東京都品川区でおじいさんが写真館を開業した。名前は「伊藤写真商会」。しかし戦争で空襲にあったため、1945年にカメラの部品工場があった都留市の谷村町地域に疎開してきて、再び写真館を始めたのだそう。戦後、全国を回っていた昭和天皇が谷村町へやってきた。そのときは、おじいさんが記録写真を撮るつ



上/大きな窓から太陽の光が差し込む。パソコンからはゆったりとした音楽が流れていた

下/白を基調とした店内。左奥に見えるのは昔使っていたカメラ。現在はデジタルで撮影しているそう(2017年4月17日)

また現在は、現像する場所と写真館をわけている。写真館の横にある小道を挟んで、哲也さんのお父さんが現像専門の写真屋さんをしているのだ。写真館で撮ると1枚5000円などと値段が高い。けれどお客さんの持つてきた写真は、1000円や2000円で簡単に同じ大きさのものが現像できる。この二つが同じお店でできることに違和感を覚えたからだそう。

代がわりするごとに名前が変わっている

なにげない小道でも、のんびり歩けば
すてきな景色が見つかります。
あなたも都留を
てくてくお散歩してみませんか。



No.1 ちょこっと都留の湧水めぐり



おさんぽした日
2017年4月30日
距離
片道 約2.3km
時間
片道 約30分
— 散歩道
— 順路



200m

はじめまして、つる

はじめての都留。
それは、私たちを驚かせ、都留の魅力から学ぶことを教えてくださいました。
これから、フィールド・ノートの一員として、都留の魅力と「はじめまして」をし、
将来に残す手助けをしていけるよう頑張ります。

紫華鬘

都留文科大学に入学し数カ月が経ったが、私はまだまだ都留の自然について何も知らない。そこで大学周辺の自然を知るため、5月2日、私は友人と散策をした。

散策中、私の興味を引きつけたのは、楽山公園入口にある背丈20〜30センチの鮮やかな紫色の花だ。花は筒状で、内側は薄紫、外側は濃い紫。その花が茎の上部にびっしりとついている。草が生い茂る道中で、ひととき存在感を放っていた。

この花は、紫華鬘^{ムラサキケマン}という。授業で一度、先生が紹介されていたので記憶に新しい。「紫色のきれいな花」。初めてこの花を見たときはそう思った。けれども先生は、「きれいだが、この花は毒を持っている」という。見た目とのギャップに驚いた。また、「この毒を食べべて生きている虫もいる」と言っていた。その虫はウスバシロチョウというチョウだった。幼虫のときに葉を食べみずから体内に毒を持つ。鳥類などの天敵に食べられないようにしているらしい。

きれいな植物にも毒がありそれを食べて生きる動物もいる。ふだんは通り過ぎてしまいう自然の繋がりがや奥深さをもっと知りたい。

宇佐美温加（社会学科1年）Ⅱ文・写真
小俣溪和（社会学科4年）Ⅱ写真

水とともに生活する都留

ドォー。私が初めて都留を訪れたときに、地面を震わせるような音に驚いた。私は思わずその音の出所を探したのを覚えている。都留で過ごして1ヶ月、都留のかたの、水が豊かだからこそ生まれる水への意識に気づいた。

5月7日に、田原の滝を訪れたときのことだ。都留にお住まいのおばあさんが、滝に興味を持つ私に「あの大きな滝以外にも、小さな滝もあって、あっち側の小さい滝は、田畑を潤してきた水が流れ出ているんだよ」と教えてくれた。滝がどこから流れてくるのかを考えると、私は今まで持っていたいなかった視点で、ハツとした。私の生活のなかで水は蛇口をひねると出てくるもの。滝についても、壮大という印象で終わってしまっていた。しかしおばあさんの目に映る滝は、生活と隣り合うもののように思えた。

生活と隣り合う水。いくら水がドォーと流れる都留であっても、水に関心を持たないと、ただ蛇口から出てくるものになってしまうのかもしれない。これから都留で過ごすものとして水にもっと関心を持ちながら、水とともに生活する意識を大切にしていきたい。

佐藤成美（社会学科1年）Ⅱ文・写真



田原の滝以外にも滝のような水の流れが多く見られる
(2017年5月29日)



流れが穏やかなところでは、水をすくうこともできた
(2017年5月6日)



左 / 花は柔らかい手触り。筒状の花の形が独特(2017年5月2日)
右 / 葱坊主^{ネギノコ}に止まるウスバシロチョウ(2017年5月12日)



近くで見ると何重にも重なっていることに気づいた
(2017年5月2日)

用水路

初めて見たときからずっときれいな小川だと思いついていたものは、農業用水路だった。見つけた場所は、都留市上谷にある金山神社のすぐそば。水路の幅は約1メートル、水深は10センチほどである。

用水路と聞くと、濁った水がコンクリートの下を誰の目にも留まることなく流れているような、薄暗いイメージを持っていた。しかし、都留を流れる用水路の水は、底が見えるほど透き通っていて、太陽の光が反射してきらきらと輝いて見えた。

水路をたどって歩いていくと、水草が生えているところや、用水路の側面から草花が咲いているところがある。用水路のそばで呼吸をするたびに、日の光をたっぷり浴びた草木のにおいがする。植物が生きられるような用水路は、今まで見たことがなかった。水のなかに手を入れてみると、流れてくる水がひんやりと冷たい。水中の手の動きを目で確認することができて、より水の透明さが分かった。

ふだんは意識して見ることがない用水路。じっくり観察するうちに、用水路のような何気ないものからも新しい発見ができるのだ。

関唯伽（社会学科1年）Ⅱ文・写真

八重桜

4月19日に都留文科大学の周りを歩いた。歩いていると本学から体育館へ行く道に桜が咲いていた。私は自然が好きだが、その植物の名前や特徴を調べるほど興味はなかった。桜も種類は知らず、「桜」としてしか認識していなかった。

しかし、興味を持った桜をよく観察するとイメージしていたソメイヨシノとは違い、花がこぶしぐらいで大きい。名前は八重桜で、花言葉は「しとやか」「教養がある」。大学という場所に似合っていると思った。観察して気づいたことは、花が下を向いて咲き、その上に葉があること。また、一つの枝から三つに分かれてそれぞれに咲いていること。花びらが何枚も重なっていたことである。

今回の観察は自然に興味を持つきっかけになった。あたりを見渡しながら学校や駅の周りを歩くと、さまざまな植物が自然に生えていたり、人によって植えられていたりしていることに気づく。なかにはコンクリートのひびから生えるタンポポもあつた。これから散策していろいろな植物に目を向け、新たな発見をしていきたい。

良知香帆（社会学科1年）Ⅱ文・写真



雪笹 ユキザサ

ササとありますが、ユリ科の植物です。茎の先端に小さな白い花が集まって咲いていて、雪の結晶のようでした

2017年5月6日 本学うら山



薄羽白蝶 ウスバシロチョウ

反対側が透けて見えるほど薄い羽が特徴のチョウです。あまり羽ばたかず、ふわふわと飛ぶ姿が優雅でした

2017年5月7日 熊太郎稲荷神社

蝮草 マムシグサ

茎の模様がヘビのムシに似ています。株によって雄雌がわかれているので、見つけると花のなかを覗いて、どちらか確かめたくってしまいます

2017年4月12日 本学うら山

【参考書籍】

高橋勝雄

『和名の由来と見分け方 山溪名前図鑑 野草の名前 春』

山と溪谷社 2010年

フィールド暦

あしもとの植物が嬉しそうに花を咲かせる春。今回は4月から5月に見つけた生きものたちを紹介します。漢字を見ると、その生きものの姿が目浮かんできませんか？ 本学フィールド・ミュージアム=文・写真



春蘭 シュンラン

3月から4月に花を咲かせます。花の中央下部に赤紫色の模様があることから、ホクロという別名があります

2017年4月22日 本学うら山



一人静 ヒトリシズカ

その名の通り、一株に一つの花をつけます。でも群生しているところをよく見かけるので、どちらかというと賑やかな印象です

2017年4月22日 本学うら山



叡山堇 エイザンスミレ

名前は、滋賀県にある比叡山が由来です。今倉山の山道で見かけました。ほかのスミレと違って、葉が裂けています。ピンク色の花が春らしいです

2017年4月29日 今倉山



筆竜胆 フデリンドウ

つぼみの形が筆の穂先に似ているため、この名前がついています。花が四方八方向かって咲いているため、花束のように見えました

2017年4月23日 楽山公園

大紫 オオムラサキ

幼虫は、エノキという木の落ち葉のなかで越冬します。小さな茶色の体から、大きな紫色のチョウに変化するのとはとても不思議です

2017年4月22日 本学うら山



夜、動物たちは？

ーセンサーカメラが写した動物たちー
『フィールド・ノート』編集部＝文・写真



B タヌキ (2017年5月1日)
うら山で見られるタヌキの溜め糞には、魚肉ソーセージの包装と思われる赤いビニールなど見られます。人里でゴミを漁っているのかもしれない



B イエネコ (2017年5月3日)
カメラを設置した7日間で3回撮影されました。うら山でも頻繁に撮影されており、うら山と本学周辺の住宅地を往復していると考えられます



C ハクビシン (2017年4月29日)
写真ではよく見えませんが、胴と同じくらい長い尻尾が特徴です。人家近くでも観察されることが多く、電線を歩く姿を見た人も多いかもしれません



C クロツグミ (2017年5月3日)
夜明けごろに撮影されたクロツグミのオス。夏鳥として日本に渡来します。森などに生息する鳥で、繁殖期になると本学うら山でも見られます



C ガビチョウ (2017年5月5日)
クロツグミに似た複雑なさえずりが特徴です。1980年代から日本で観察されるようになった外来種で、都留市内の低山帯でもよく見られます



C アナグマ (2017年5月6日)
側溝を伝って、大学敷地内まで降りてきていることがわかりました。側溝は中型のほ乳類にとって通り道となっているようです

キャンパス周辺にセンサーカメラを仕掛ける

本学フィールド・ミュージアムでは、センサーカメラ（赤外線を感じると自動でシャッターが切れるカメラ）を本学のうら山に設置して動物の調査をしています。カメラは雨よけの箱に入れて、紐で木にくくりつけます。センサーカメラは日の光にも反応してしまい、動物の写っていない写真が撮れることも。それを防ぐために、カメラが西日に照らされない向きになるよう設置しました。

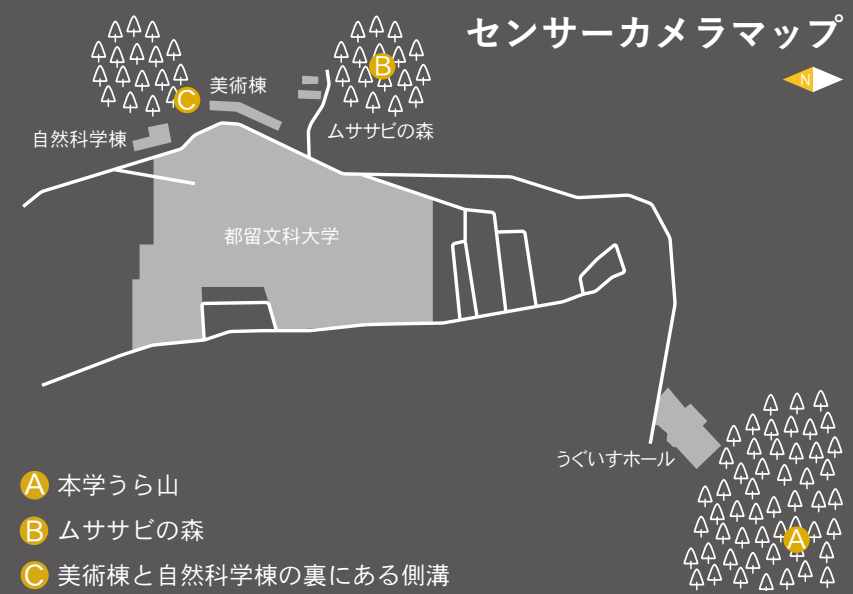
今回は本学うら山のものとは併行して、4月30日から5月8日のあいだ、キャンパス周辺の2箇所にセンサーカメラを仕掛けました。



ムササビの森では木の幹にくくりつけました。近くにムササビライブカメラがあります



美術棟と自然科学棟の裏にある側溝。ここを通った動物を撮影できます



A ノウサギ (2017年3月4日)
家で飼われるカイウサギ(アナウサギ)とは異なります。ノウサギは巣穴をつくらず、藪のなかや木の根元などで過ごします



A アナグマ (2017年2月28日)
タヌキと混同されることがありますが、アナグマはイタチ科、タヌキはイヌ科の動物です。目の周りだけ黒みを帯びるのが、アナグマの顔の特徴です

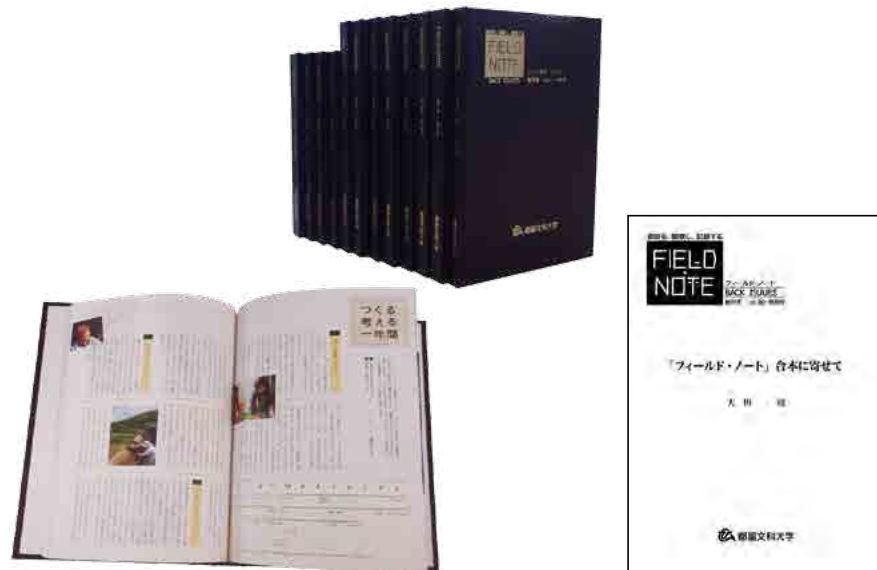
『FIELD・NOTE』の合本を刊行しました

2002年に創刊された『フィールド・ノート』は、2016年に90号を迎えました。これもみなさまの温かい励ましとご協力のおかげです。ありがとうございます。

『フィールド・ノート』は、都留文科大学の学生と市民とが地域を観察し、記録し、学びあうことをテーマに編集している冊子です。現在、都留文科大学地域交流研究センターのフィールド・ミュージアム部門の機関誌として、年4回、700部を発行しています。この『フィールド・ノート』を、地域を知り・地域に学ぶ資料として未来に遺していこうと、このたび12巻の合本としました。今後は、多くのかたがたに活用していただけるよう索引制作などをしていく予定です。ホームページでも全号がご覧いただけるよう作業に取りかかります。

今回の合本刊行にあたっては、都留文科大学元学長の大田堯^{たかし}先生の『フィールド・ノート合本に寄せて』と題した別刷りも発行しました。あわせてご覧ください。

これからも地域の日常に目を向け本物から学ぶ姿勢を忘れずに冊子を創っていきます。今後ともよろしくお願いいたします。



上：12巻ある合本を並べてみました
左：ページを開いていくとその歴史に気づきます
右：『フィールド・ノート合本に寄せて』の表紙です

FIELD・NOTE News

駅の展示

この春に都留文科大学前駅の展示替えをおこないました。テーマは「うら山博物館」です。誌面に登場した生きものや草花を展示で紹介しています。それらは、私たちが「うら山」と呼ぶ本学裏手にある山で拾ったものです。背の高い木の写真は上に、足元で見られる花は下に展示して、室内ではうら山で聞くことのできる音をじっさいに流しています。本物の草花に触れて、うら山を訪れたような感覚になってもらえたら嬉しいです。(伊藤瑠依)



写真だけでなく実物も置きました
(2017年4月21日)

勉強会

4月13日、ミュージアム都留の学芸員である森屋雅幸^{もりやまさゆき}さんにお越しただいて、峠の勉強会をおこないました。私たちが今号で峠を取材するにあたり、峠がどういうもので、都留にどのような峠があるのかなどの知識を共有するためです。この勉強会で私たちは疑問や不安を解消でき、峠の取材をスムーズにおこなうことができました。(高橋光)



素朴な質問にもていねいに答えてくださいました(2017年4月13日)

アオゲラがやってきた

ムササビライブカメラを設置している巣箱の一つに、アオゲラというキツツキの仲間がやってきました。5月14日から利用し始め、6月8日まで毎日使っています。19時には巣箱に戻り、5時には外に出て行きます。ねぐらとして利用しているのでしょうか？首を丸めて寝ているので、とても鳥には見えない。(小俣溪和)



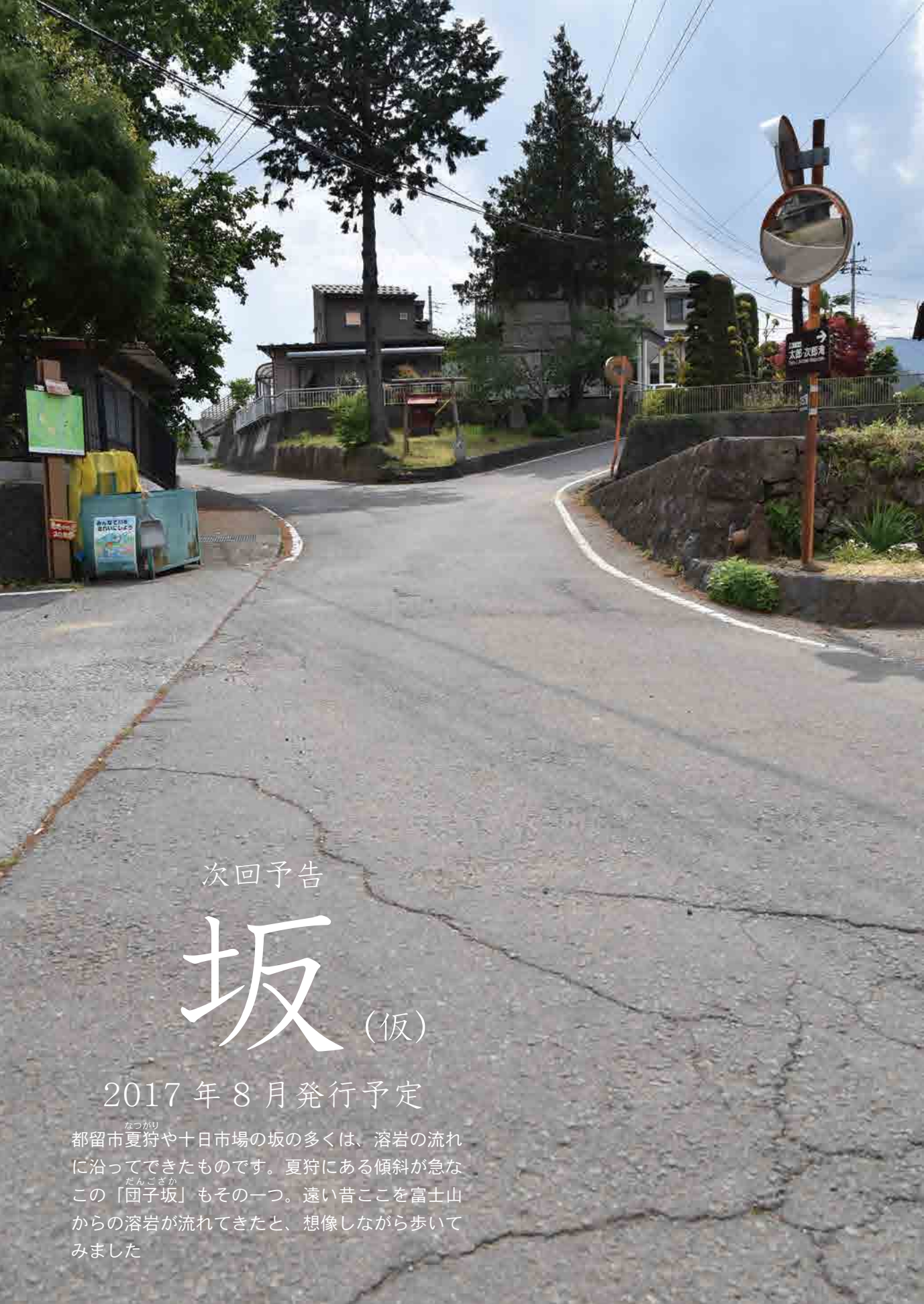
いつ見ても同じ体勢で寝ています
(2017年5月21日)

種まき

4月29日、4号館前にあるビオトープにヒヤクニチソウやハーブの種を植えました。5月に入り、プランターをのぞくと小指の先よりも小さいヒヤクニチソウの双葉が、ぽこぽこ顔を出しているのを見つけました。自分で種をまいて育てるのは、小学校のアサガオ以来。これからどんどん伸びて、花が咲くときが今から楽しみです。(長尾泉)



日当たりのよい4号館前は植物がよく育ちます(2017年4月29日)



都留市夏狩や十日市場の坂の多くは、溶岩の流れに沿ってできたものです。夏狩にある傾斜が急なこの「団子坂」もその一つ。遠い昔ここを富士山からの溶岩が流れてきたと、想像しながら歩いてみました

FIELD NOTE

no. 93 Jun.

発行人
北垣憲仁 (31,45,48)
統括編集者
西教生 (42-43)
編集長
長尾泉 (12-13,40-41,44)
南條新 (14-15,42-43)
副編集長
山内利奈 (6-7,16-17,24-25)
編集
伊藤瑠依 (44)
加藤萌香 (35)
塚原瑞穂 (36-37)
小俣溪和 (2-3,12-13,35,44)
高橋未瑠来 (8-9)
窪田りさ (4-5,8-9)
江利そらむ (16-17,44-45)
小泉篤広 (1,22-23)
佐藤琢磨 (14-15,26-27,48)
杉浦茜 (10-11,20-21,28-30)
高橋光 (18-19,44)
平岡摩梨菜 (10-11,32-34,46-47)
宇佐美温加 (38-39)
佐藤成美 (38-39)
関唯伽 (38-39)
良知香帆 (38-39)
編集補助
今村遥香
ロゴデザイン
工藤真純

[] は編集担当ページ

FIELD-NOTE (フィールド・ノート) 93 号
発行日：2017 年 6 月 30 日
発行部数：2700 部
発行・編集：
〒402-8555
山梨県都留市田原 3-8-1
都留文科大学
地域交流研究センター
フィールド・ミュージアム部門
『フィールド・ノート』編集部
E-mail : field-1@tsuru.ac.jp

バックナンバーは都留文科大学地域交流研究センターにありますので気軽にいらしてください。

編集後記



すみかが変わると食生活も変わります。私はひとり暮らしを始めてからお肉や牛乳、チーズなどの高価な食材を買わなくなりました。安くてお腹にたまり、おいしい食材はなにか……。探して見つけたのがもやしでした。1 週間もやしだけで生活したときは、飽きないようにさまざまなレシピを考えたものです。なかには失敗もあって、苦しみながら完食した料理もあります。そのころは毎日試行錯誤しながら料理をしていましたが、今ではぱぱっと自分の思い通りに味付けができます。これってもしかすると苦労したおかげかもしれません。(高橋未瑠来)

だんだんと外の景色が見慣れないものになっていくのを、都留に向かう父の車から眺めていました。父と母が帰った次の日、車のなかから見ていた景色を歩いてみようと思い、散歩をしました。きょろきょろと周りを見渡ししながら見慣れぬ道を歩いたときの記憶は今でも残っています。その日は迷わないようにと、家の近くを歩くだけでした。それから 1 年が過ぎ、都留での生活は 2 年目になります。今では 2 駅ぶんほどの距離を散歩するようになりました。散歩の距離は伸びたけれど、なにかおもしろいものはないかなと、きょろきょろしながら歩くことは相変わらずです。(杉浦茜)

つるに引っ越してきたとき、大学の近くにアパートが多くて驚きました。私の新しい下宿先は大学から徒歩 15 分ほどで、近いと思ってました。でも友だちのなかで一番遠い場所でした。最初は失敗したなと思ったのを覚えています。けれど 1 年過ごしてみると、遠いぶん朝早くに準備するようになって遅刻しなかったり、夜に外へ出ると星がきれいだったりといいところも見つかりました。まさに住めば都とはこのことです。(佐藤琢磨)



ガラス板の下にヒマワリの種を置くと、1週間ほどでヒミズのトンネルができました(2010年5月28日)

モグラに出会うための工夫

日本には世界でも最小クラスの哺乳類が生息しています。前号で紹介したカヤネズミがそうです。今回紹介するヒミズも、モグラの仲間では体長が世界で最小クラスです。体長は9センチほど。光沢のある毛が美しいモグラです。

ヒミズは地中で暮らすため、ふだん目にする機会はほとんどありません。わたしたちの足もとにいるにもかかわらず、今なおモグラについての生態はほとんど分かっていません。

たいていヒミズは、倒木の下などにトンネルを掘ります。そこで、倒木の代わりに、地面にガラス板を置いておくとヒミズのトンネルができることがあります。トンネルができれば、じっと待ってみましょう。素早くトンネルを移動するヒミズに出会えるかもしれません。



ヒミズはおもに昆虫を食べて暮らします(2010年10月10日)

フィールド・ミュージアム

「都留フィールド・ミュージアム」とは？：私たちのフィールドは、特定の地域に固定はしませんが、とくに都留市を拠点として富士山とその山麓、桂川(相模川)流域に注目して活動しています。

名称について：大学だけの取り組みではなく、広く市民と共有し、地域に開かれた交流を育みたいという思いから、「都留フィールド・ミュージアム」という表記を用いています。本学の地域交流研究センターが、この活動を担っています。